

採用案内

Spotlight on アルムナイ

各方面で活躍中のアルムナイの今、そしてその想いにスポットを当てて配信しています。自薦他薦を問わず、ご登場いただける方をぜひご紹介ください。

概要

アフリカ・ウガンダで成し遂げたい夢
～豊かな発展とは何か
株式会社WBPF Consultants (ウガンダ)
代表 伊藤淳

2014年6月、アフリカ・ウガンダに1つの事業が誕生した。代表は、元アクセンチュアの社員、伊藤淳さんだ。目指すのは、自らの頭で考え抜き、自分たちで未来を創っていく人材を育てること。コンサルタントが、日本から1万キロ以上離れた東アフリカで起業した理由とは一。



“縁”のスタートは大学時代

ウガンダにある外資系企業で働く現地スタッフをトレーニングし、「担当する仕事を自分自身の課題と主体的に捉え、責任を持って取り組む姿勢」を持った人材を増やすこと。伊藤淳さんが着手した事業である。

これまでたどった道筋は、まっすぐでも計画通りでもない。「縁が何重にも積み重なった結果」だと伊藤さんは言う。そして、“縁”のスタートは、アフリカにも起業にも国際開発にも興味がなかった大学時代までさかのぼる。

機械工学を専攻し、エンジニアを目指していた。ところが、学生だけでレースカーを製作する競技会に参加し、実践的な経験をするなかで「自分にエンジニアは向かない」ことを自覚する。

エンジニアは頭の中で、3次元、4次元の設計図を組み立てる能力が必要。だが、「地図を読むことさえ苦手」な伊藤さんはその力が不足していると感じたのだ。

さらに「一つのことを突き詰めることができない」と自己評価していた伊藤さんに、友人がアドバイスする。「お前のやりたいことは、コンサルタント会社で実現できるのではないか」。

一つのことを突き詰めることができないということは、裏を返せば「好奇心旺盛でいろいろなことに興味がある」ということだ。あらゆる業種の企業を相手にするコンサルの仕事は、伊藤さんの「幅広く多くのことを学びたい」という要望にぴったり合致。

2005年、アクセンチュアに入社した。

原点はアクセンチュアでの教え

入社後、通信や製造業の業務改革案件など戦略プロジェクトを中心に携わる。

今とは違い、その頃のプロジェクトは徹夜も多かった。ある日、深夜0時になって上司に「明日の朝、提案書をまとめて持ってくるように」と言われる。徹夜で仕上げた上司に手渡すと、目の前でその提案書を破って捨てられた。

「小手先だけで仕事をするな。この程度の仕事で満足するな。あきらめるな。自分ができないことを自覚したうえで、それでもできる限り最上の仕上がりを目指す。それがプロとしての仕事に対する向き合い方だ」

アクセンチュアで教えられた「プロとして仕事に向き合うこと」が、いまの伊藤さんの軸となって、ウガンダでの外資系企業スタッフの人材トレーニングに活かされているという。

最大の転機は入社4年目、2009年1月のことである。休暇中のスノーボードで大怪我をして、1カ月の入院を含めて3カ月もの間、職場から離脱してしまった。ケガの功名とも言うのだろうか、仕事に追われる日々から一転、考える時間ができた伊藤さんは、これまでの自分を振り返った。

職場の仲間、友人、家族が心配し、励ましの言葉をくれる。それなのに目の前の仕事に没頭するあまり、「自分のことばかりを考えてきた」ことに気づく。またコンサルタントの仕事をおもしろいと感じる反面、一定の限界も感じていた。外部の人間としてクライアントに提案はできるが、論理だけでは答えの出せない重要な意思決定に関わる機会は少ない。どんなに想いを込めたプロジェクトでも、お客さんの予算がカットされれば、その時点でプロジェクトは打ち切りとなる。

「一度きりの人生なら、やりたいことをもっとやったほうがいい。自分のためだけではなく、これまでお世話になった人や社会、人のためにつながることをやったほうがいいのではないか。3カ月の静養中に、この考えがどんどん自分の中で大きくなっていきました」

マサイ族の村でアクセントが活躍



「やりたいこと」を具現化するため、伊藤さんが選んだのはVBP（VSOビジネスパートナーシッププログラム）だった。アクセントでは、社員の人材育成と社会貢献を目的としたプログラムとして、途上国のNGOや政府などでボランティアとして働くVBPを実施していた。先進国30カ国から年間200人近くが参加していたが、日本オフィスからは伊藤さんが3人目の参加者だった。

2010年3月、伊藤さんはアフリカ・ケニアの田舎、マサイ族の村に行く。電気、水道というインフラが整備されていないサバンナの真ん中、歩いているとキリンやシマウマ、ゾウに出会えるような場所。ここから伊藤さんとアフリカの“縁”がスタートした。

マサイコミュニティで様々な活動を行う地元のNGO団体で伊藤さんがやったことは「まさにアクセントでの仕事そのまま」だという。まず頼まれたのは、団体のアニュアルレポートを作成するため、「基礎会計システムを作って欲しい」というものだった。

だが、Windows98の古いラップトップパソコンが一台あるだけの小さな団体で、そもそも帳簿すらつけていない。システム構築の前に根本から組み立てなければならないことがある。結局、組織や経営の改革、給料や人事業務の構築、マイクロファイナンスの立ち上げ、学校運営などトータルで20程度のプロジェクトに関わった。

「一緒に働く仲間の一人に、私と同じ年齢で、大学出の優秀なマサイ族の男性がいました。彼は9カ月間、一緒に働く間にプランニング、マネジング、ディスカッションまでできるようになり、その後、NGOの代表に就任しました。現在は、別の大きなNGOの部門の責任者として活躍しています。私自身がアクセントの上司・先輩・同僚から教わってきたことを共有したことで、たった9カ月間でこれほどまでにいろいろなことを変えることができるのかと驚きました」

ポテンシャルとダイナミズムに魅せられて

これまで磨いてきたスキルが社会や人の役に立つことを実感したと同時に、アフリカ・ケニアには多くの課題があり、また一方で大きな可能性を秘めていることも感じた9カ月間。ボランティアから帰国後、英語力も上達し、コミュニケーションやプロジェクトマネジメントへの自信がついた伊藤さんは、グローバル・プロジェクトに関わる機会が増えた。

なかでもポテンシャルのある途上国でありダイナミックな展開ができるアフリカでのビ

ビジネスに強く惹かれた伊藤さんは、アクセントチュアに在籍しながら、アフリカで働ける機会をつかむ。

途上国のNGO、国際機関、政府機関などの団体や機関に対して、営利企業より安価な価格でコンサルティングサービスを提供するプログラムADP (Accenture Development Partnership) に応募し、2013年6月、ケニアの首都ナイロビで東アフリカの医薬品のサプライチェーン拡大戦略を策定するプロジェクトの責任者として赴任したのだ。

だが現実には甘くない。イギリス人、アメリカ人、ケニア人、エチオピア人、ルワンダ人、マラウィ人を日本人の伊藤さん一人で束ねるプロジェクトは難易度が極めて高かった。また、首都ナイロビのオフィスと会社の用意してくれた高級なアパートとの往復の生活は、現場である現地の生活に触れる機会も少なかった。

結局、大幅なスケジュールの変更や予算変更があり、プロジェクトマネジャーの立場でありながら、プロジェクトから途中離脱する形で日本に帰国することになった。

持続可能な社会とは 目指すべき姿とは

コミュニティでのプロジェクトの中で、最後までやりきれなかったことがある。

踊り、歌、言語、洋服、価値観、食習慣……。マサイの豊饒な文化や伝統のうち、何を残し、どんな発展を受け入れていくのか。実際に文化が消えてしまった他地域の例などを引き合いに出しながら、コミュニティ・コミッティなどを開催して議論しようとしたものの、結局うまくいかなかった。

痛感した。自分たちで論理的に考え、ディスカッションし、方向性を決めていく人材を育てないと、グローバリズムへ適応しながらも、自分たちのローカリティを守り、持続可能なコミュニティを築くことはできない、と。

アフリカやウガンダの将来、自身のキャリアについて自問自答しながら帰国。お世話になっていた上司から「ぴったりのプロジェクトがあるよ」と電話で声をかけられたが、その時に出た言葉は「会社を辞めてアフリカで起業したいと思っています」であった。自分でも驚いた。

「先日、現地の人に“教育の重要性を教えて欲しい”と言われました。明確な答えはまだ出ていませんが、ともにディスカッションしながら、何かを作り上げることができる、一緒に働く仲間を増やすことだと考えています。だから“仲間”という思いを込めて、私は自分自身をティーチャーではなく、トレーナー・ファシリテーターだといつも伝えていきます」

地域住民が、よりよい未来を自らの手で選択できるように。起業から4カ月。伊藤さんのアフリカ生活は、ウガンダの人材育成事業でその一步を踏み出し、「実現したい姿」へと着実に仲間を増やし続けている。

伊藤さんがウガンダの食生活を紹介するビデオが見れます (世界で戦うエリート飯！)
<http://toyokeizai.net/articles/-/34916>